ふかまちのまど
第二十号
九五年二月一日

戦後五十年

高崎　修

今年は戦後五十年にあたる区切りの年であった。

終戦直後のことを思い出すと、停電はしばしばのことでロ－ソクやカンテラに頼り、衣料品や食料品の配給が時たまあるだけで殆ど自給自足の生活であった。

つるべによる井戸からの水汲み、どこに行くにも歩いてゆくこと、麦飯といもが主食で季節の野菜と味噌、香々がお采、鍬と鎌を主体に金肥も農薬も使わない百姓仕事という有様は、江戸時代の生活もかくやと思われるものであった。

物不足は昭和二十年代は続き、その後朝鮮戦争の特需で景気づき、所得倍増政策等による高度成長期を経て現在の物のあふれる豊かな時代を迎えている。

私が物心ついた時から五十年の間の変化の大きさ、速さというものは、全く子供の頃には想像もできないものであった。又、これだけの経済的社会的変化に直面した世代もかってなかったとおもう。

この様に悲惨な生活を強いられたのも戦争の結果であったが、世界中が驚く程の早期復興をなし得たのもこの五十年に全く戦争がなかったからである。

我国の歴史上これだけ長期に亘って戦争のなかった時もなかったと言われる。

平和の恩恵を一杯に受けている今、混乱の時代を思い起こして平和こそ何ものにも代え難いものと痛感している。

高度成長を続けて来た我国経済も、製造業の国外移転等により、企業の縮少リストラ、失業率の上昇等の転換期にあり、成長重視からの脱却を求められ、生活の見直しが行なわれている。

これからの社会は、物質的な豊かさから精神的な豊かさ、ゆとりが求められているものである。

深町においても変化が激しくなるものと考えられるが、高齢者の増加は避けられず、お互いに助け合いが必要となってくる。次の世代を担う子供達をたくましく育てることも大切だ。

いろいろな課題に向かって町内の交流を積極的に進め、議論が高まることを期待する。▲▲

深町と私

国川玲子

町中で教えた子供達に出会うことがあります。声を掛けてくれるのは大変嬉しいのですが――、「先生にようおこられた。」とよくいわれます。

病院勤めの子ども達が以外に多いものですから、「病気になったら大事じゃ、どんなことをされるかわからんからね……」と冗談まじりにその場をごまかしていますが。

深小へ勤めたのは今から三十年も前のこと。教師としての力不足、自分のいたらないところを子供達にぶっつけていたのだなと恥ずかしく思っています。子供達は、私のくだらない小言などものともせずぐんぐん成長していて、あの当時の私の年齢を越えた人たちもいます。今会うと力強く生き生きと輝いています。

深小のPTAで活躍しているとか、仕事に打ち込んでいる様子が体中にみなぎり、今まさに人生の真っただ中で命をもやしている力強さにまぶしく、圧倒されてしまいます。

私は、深小ではとても楽しく有意義に過ごしました。子供達からもずいぶんたくさん学びました。もちろん町の人たちからも、自然の豊かさの中で素直に育っている子供達、農作業を家の人達と共に取り組む姿、自分の町を愛する心、素直に一生懸命取り組む姿勢。城山登り、深一周マラソン、滝での飯ごう炊さん、竹馬乗り、田植え稲刈り等々……思い出すのは楽しいことばかり、自然の中で心豊かにのびのびと過ごさせてもらいました。

今年幼稚園が学級増になったと聞きます。町を離れていた人たちが深町へ帰ってこられたのですね。市内では学級減になってきているところが多いのに。自然の豊かな深町で子育てしたいと思ってのことでしょう。嬉しいことですね。私も峠を越えて深町へ入ると故郷へ帰って来たような心安らぐ気持になります。今だに深町の敬老会などへやって来て下手な踊りなどさせてもらっています。

柿・桃・黒豆・野菜・お米など、深町のひとたちから届けてもらって喜んでおいしくいただいています。深町の皆様にどこで出合っても必ず声を掛けて下さり、子供達の成長ぶり、町の出来事など聞かせて下さいます。

深町は昔おせわになったところでなく、現在形でお世話になっています。ありがとうございます。深町のますますの発展を心から願っています。▲▲

深の歴史（二）

高崎壽郎

―和気広虫と豊臣秀吉―

「和気広虫と豊臣秀吉と深はどんな関係があるの」と、不思議に思われる方も多いと思う。

まず、広虫と関係ある妖僧道鏡と宇佐八幡事件について簡単に説明したい。

奈良時代のことである。天平勝宝元（七四九）年、孝謙女帝（大仏建立の聖武天皇の第二皇女）は、聖武天皇のあとを受けて即位。道鏡は法相宗の僧だったが、天平宝字五（七六一）年孝謙上皇の病気全快に功があり、上皇の寵愛を受けて政界に進出した。

その頃実権を握っていた藤原仲麻呂はこれを喜ばず、孝謙天皇の次の淳仁天皇を擁して反乱を起したが失敗した。

天平宝字八（七六四）年、孝謙上皇が再度即位して、称徳天皇（重祚・同じ人で二度も天皇）になると、道鏡はますます勢力を得て、天平神護元（七六五）年、太政大臣禅師翌年法王となり、更に神護景雲三（七六九）年、宇佐八幡宮の神託にこと寄せて皇位を窺った。

この時、和気清麻呂（姉広虫と共に称徳天皇に出仕していた）は八幡使となり、帰京して神託が偽託なることを復奏し、道鏡の陰謀は失敗した。このため道鏡の怒りを買い、清麻呂は大隅の国（鹿児島県）に、広虫は連座して備後の国（広島県）八幡荘へ配流された。

広虫は同年船で栗原浦に着き、大迫峠から深へ、更に綱掛峠から桜瀑・保宇曽（彭祖）瀑のある三戸（御調）坂を越え、藤原百川の采地八幡荘へ入った。

翌宝亀元（七七〇）年八月四日、称徳天皇は崩御、権力を失った道鏡は下野国（栃木県）へ配流の身となり、和気姉弟は都へ復帰。二人は備前（岡山）の出で、わずか一年であったが、配所の月をどんな気持ちで眺めていたことだろう。

次は、来年のNHK大河ドラマに登場する秀吉。

天正十（一五八二）年、織田信長は明智光秀に本能寺の変で殺され、天下統一の夢は豊臣秀吉の双肩にかかってきた。

秀吉の国内統一の戦は着々その成果をを収め、残ったのは九州と東北だった。

九州では、北方の大友氏南方の島津氏が覇を競っていたが、天正一五（一五八七）年三月、大友氏の懇願により、関白は九州攻めに向かった。

今津から西村へ、更に三成から本郷に入ってきた秀吉一行は、木頃八幡宮の参道の古松（太閤駒繋松の伝承あるも現在枯死）へ駒を留め、戦勝祈願をした。

そして深村山中村を経て糸崎長井浦から九州肥後へ向かって帆をあげた。

同年五月には、戦いも終わり大坂に凱旋し、間もなく念願を果たす。

このように、奈良時代と安土桃山時代に、歴史に名の残る人物が深の地を通過しただけのことだが、これは奇縁であり、深の歴史に彩を添えてくれるものである。▲▲

廃品回収に協力下さい

十二月十日午前八時から各家庭を訪問します。PTA

いらっしゃいませ

☆三戸昭良様　十月　東峠
☆古川　明様　十月　東峠
☆西永道雄様　十月　仲城

三原市統計資料

年月	総人口	世帯数
94.4	900	294
9	916	300
95.4	944	309
9	972	316
10	982	321

十二月町内行事予定

★小学校
▼学習発表会　三日　▼参観日・期末懇談会　十二日　▼（幼）家庭教育学級　十二日　▼（幼）お楽しみ誕生会　二十日　▼終業式　二三日
★尚寿会
▼忘年会　五日
★女性会
▼親睦会　上三日・中二日・下一日
★消防団
▼上級幹部謝賀会　三日　▼年末警戒　二二日～三一日
★町内会連合会
▼歩道用地測量・丁張り作業終了予定（県土木）

展望席

犬が人を噛んだではニュースにならぬが、人が犬を噛めばニュースになる。報道されるニュースは当然ながら暗く切ないものが多い。政官・財の相も変わらぬスキャンダル。オーム真理教の戦慄的報道。最近では小学校低学年生による高層ビルからの物投げ。新潟県上越市ではいじめを苦に中学一年生が自ら生命を断った▲十三日朝のNHKは、帰ってきた中国残留孤児が再び中国に帰ると報じた。千愁の想で日本の土を踏んだであろう孤児の心中いかばかりであろうか。今の日本にはこの人達を受け入れる空間はすでにないのだろうか。報道では「何故」の部分が省かれていた。「中国人の夫や、子供のいる中国に帰ります」のコメントを残して▲この報道に接して思うことは、日本国の日本人の豊かさとは一体なんだろう、ということである。私達の周囲にもこれに類することはごまんとある。弱者切り捨てに自分は加担してなと断言できるだろうか。